文学的な文章の読解に有効な「言語技術」の開発と活用

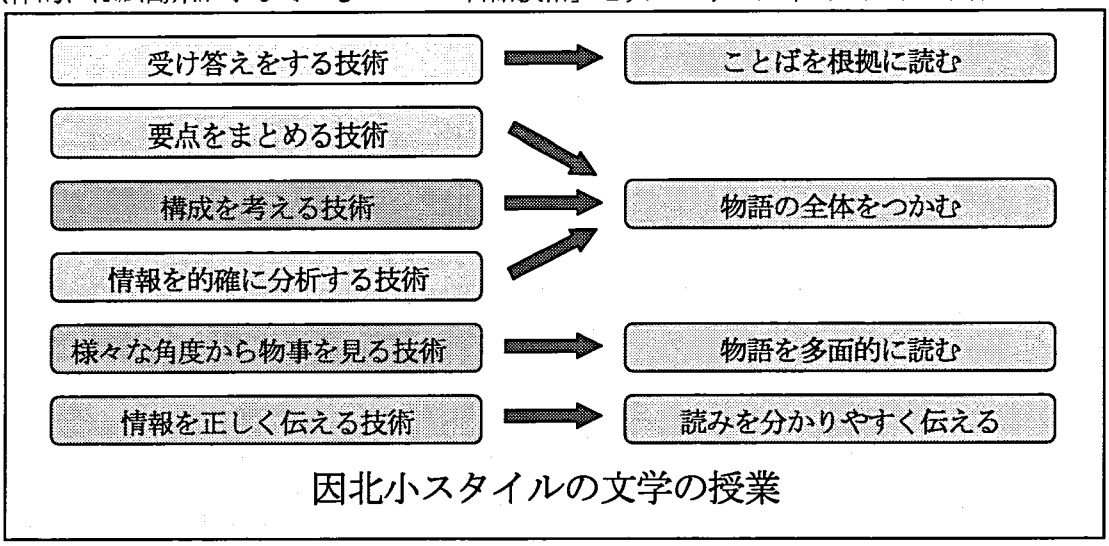
尾道市立因北小学校　　吉田　貴志

1　実践の趣旨

本校では，平成１７年より広島県が進めている「ことばの教育」の研究指定校として，「言語技術」を国語科の文学的な文章の授業に効果的に活用する取組みを進めてきた。

当初は，「受け答えをする技術」を活用した「書き方」や「話し方」を習得させるところからスタートした取組みだったが，文学の授業のどこでどの「言語技術」を活用することが児童の「読むこと」の力を高めることにつながるのかという視点で授業実践を積み重ねてきた。その中で，「言語技術」を効果的に活用した「因北小スタイル」の文学の授業を創り上げてきた。

具体的には広島県が示している６つの「言語技術」を次のように文学的な文章の授業で活用してきた。



本実践は，「言語技術」を活用した「因北小スタイル」の文学の授業で，児童の読みがどのように深まっていくのか，１単元を通して検証したものである。

2　実践の概要

（1）単元名　ファンタジーの世界を味わおう

教材「きつねの窓」　安房直子　文　大森翠　絵（教育出版６年下）

（2）単元の学習目標

叙述をもとに登場人物の心情や場面の情景を想像しながら，ファンタジー作品を読み味わう。

（3）単元の活動目標

私の「きつねの窓」をつくろう。

（4）指導計画（全６時間）

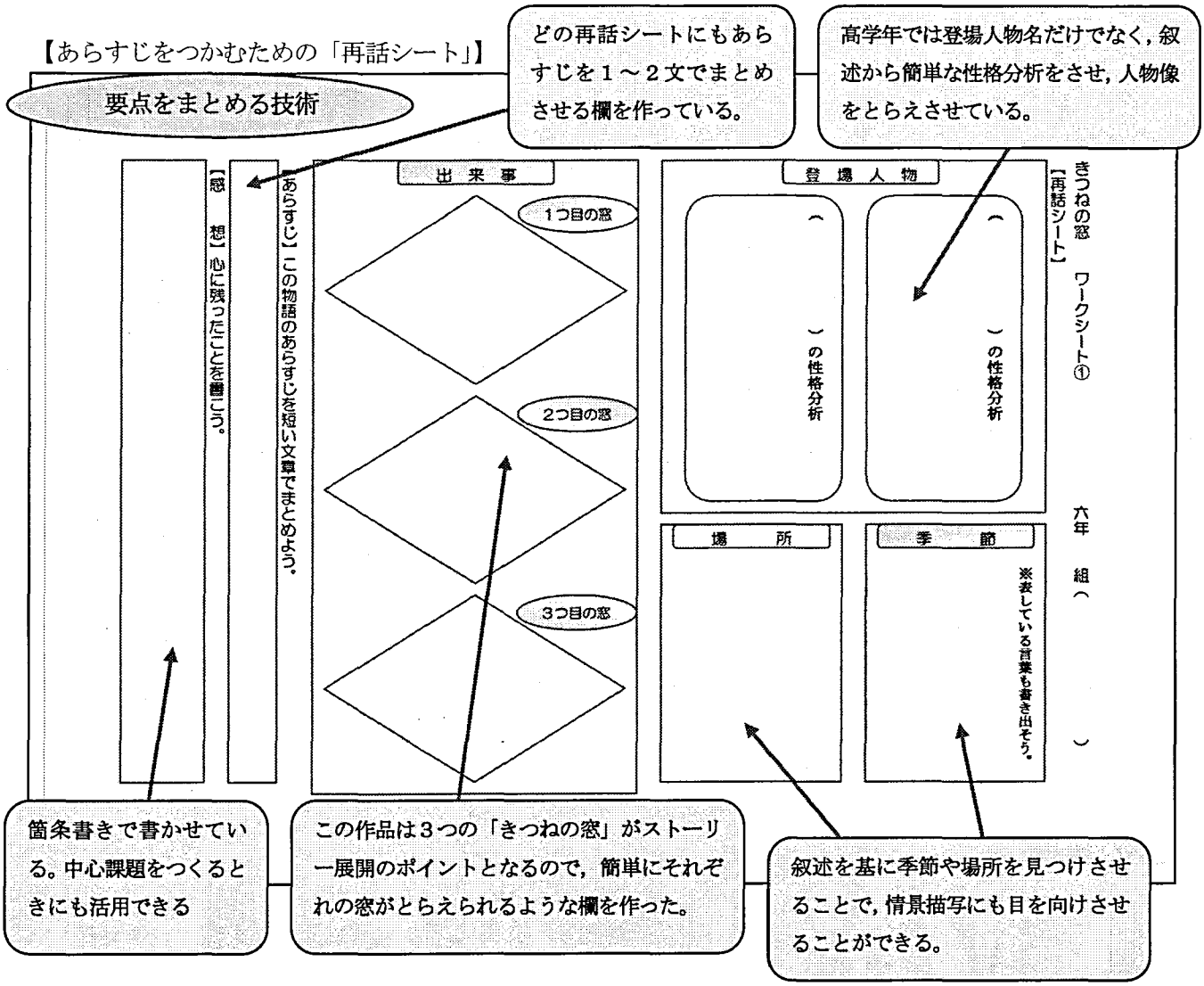
次（時間）	学　習　活　動	活用する「言語技術」
１　次 （２時間）	・「きつねの窓」の全文を読み，あらすじをつかむ。 ・ファンタジー作品の構造分析をする。	要点をまとめる技術 構成を考える技術 受け答えをする技術
２　次 （３時間）	・３つの窓について考え，登場人物の心情や場面の情景をとらえる。	様々な角度から物事を見る技術 情報を正しく伝える技術 受け答えをする技術
３　次 （１時間）	・「きつねの窓」の学習を生かして，自分を見つめながら，私の「きつねの窓」をつくる。	様々な角度から物事を見る技術 情報を正しく伝える技術

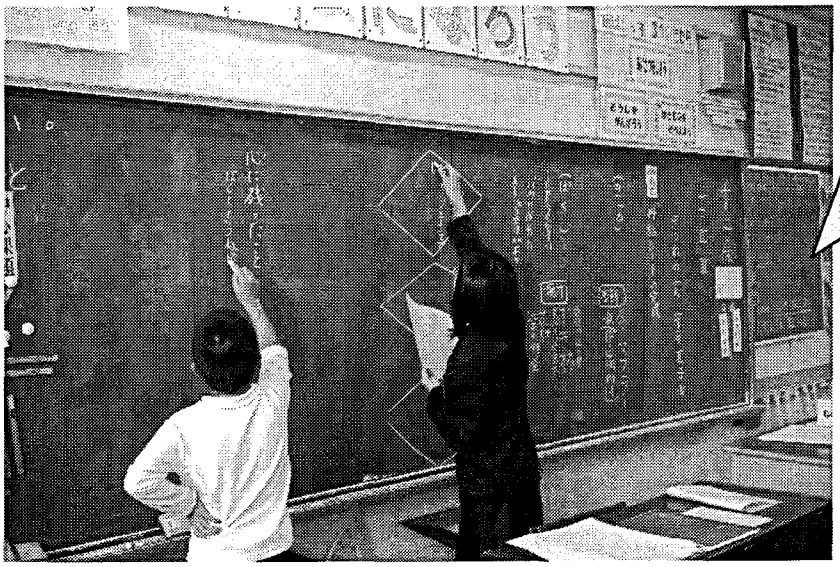
（5）授業の様子

１次では，作品のあらすじや構成をとらえるために「要点をまとめる技術」を活用した「再話シート」と，「構成を考える技術」を活用した「構造分析シート」を使った。

「再話シート」には，作品を読む鍵となる３つの「きつねの窓」の書き込み欄を作ることで，児童は作品のあらすじを短時間でつかむことができた。

【あらすじをつかむための「再話シート」】

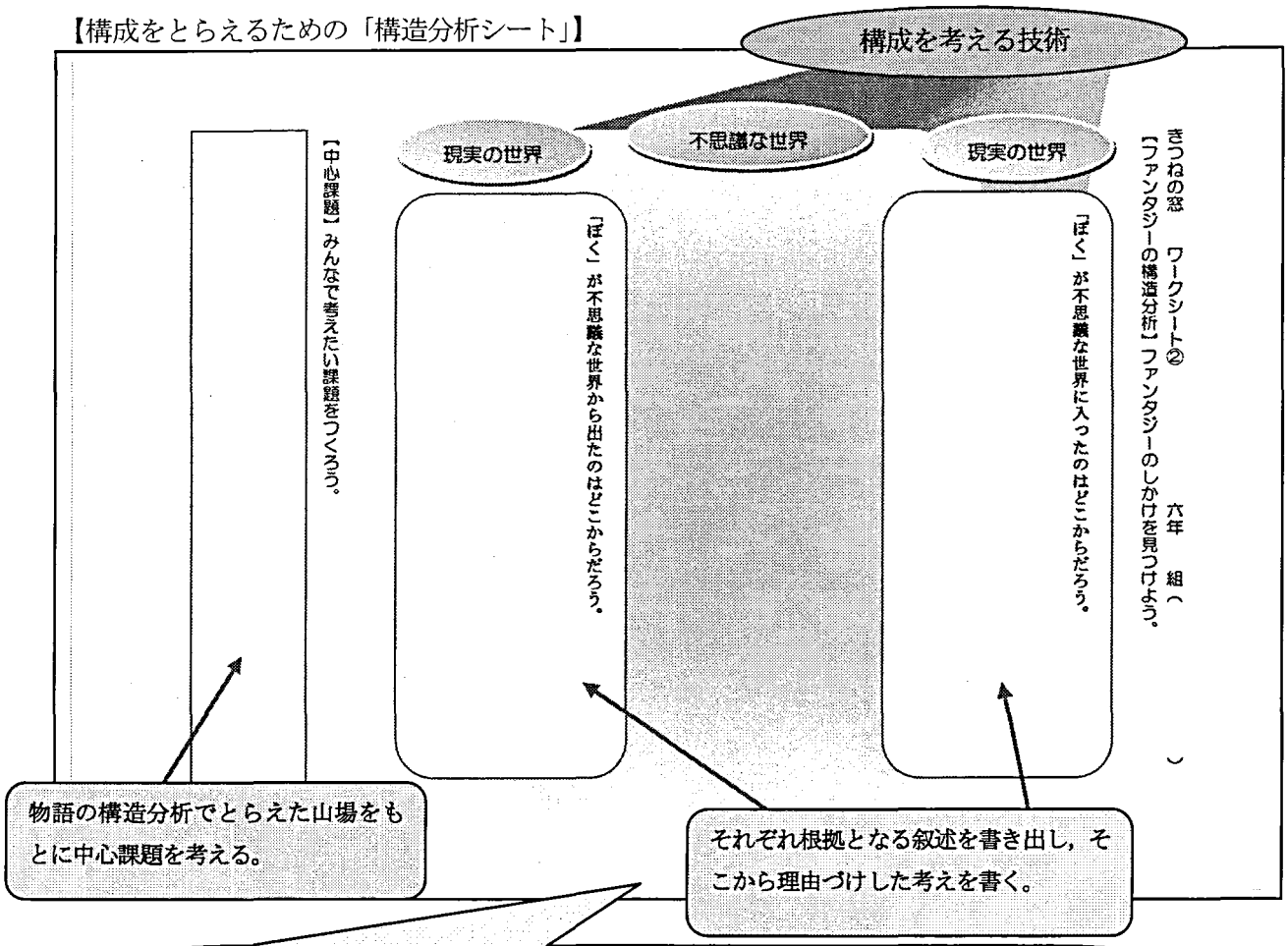




児童は教師の読み聞かせを聞きながら「再話シート」に書き込みをしていく。物語のすじをつかむために必要な要素をメモしていく「再話」のトレーニングが生かされる場面である。「再話シート」を完成させた児童は，自分がとらえたことを次々に板書していく。こうすることで，読みの交流が生まれる。

また，「構造分析シート」では，ファンタジーのしかけ（現実世界と非現実世界の境界）を考える欄を作ることで，作品全体の構成を見通すことができた。さらに，この構成を読む学習を通して，現実世界に戻っても非現実の「きつねの窓」を作り続ける主人公の行動に焦点を当てた中心課題を作ることができた。

【構成をとらえるための「構造分析シート」】



ファンタジーのしかけを見つけるという視点で全体を読むことで，児童は作品の不思議な世界に入り込んでいくことができた。特に主人公の「ぼく」が不思議な世界から出たのはどこからかについて意見が分かれ盛り上がった。「不思議な世界から出た時点」を特定するには，叙述から根拠を見つけ解釈する力が必要である。「受け答えをする技術」の質が問われるところである。

<u>授業記録から</u>

Ｃ１：「ぼく」が不思議な世界から出たのは，「きつね」に帰り道を教えてもらって，見慣れた杉林に出たところです。見慣れた杉林というところから現実の世界に戻ったことが分かります。

Ｃ２：そこは，まだ現実の世界ではないと思います。なぜなら，そのあと「ぼく」が窓を作って昔の自分の家を見ているからです。

Ｃ３：「ぼく」が手を洗ってしまったところで，不思議な世界から出てしまったと思います。それからいくら窓を作っても何も映らないからです。

Ｃ４：完全に不思議な世界から出たのは，手を洗ったとこだと思うけど，杉林に出た時から少しずつ現実の世界に戻りつつあったのだと思います。

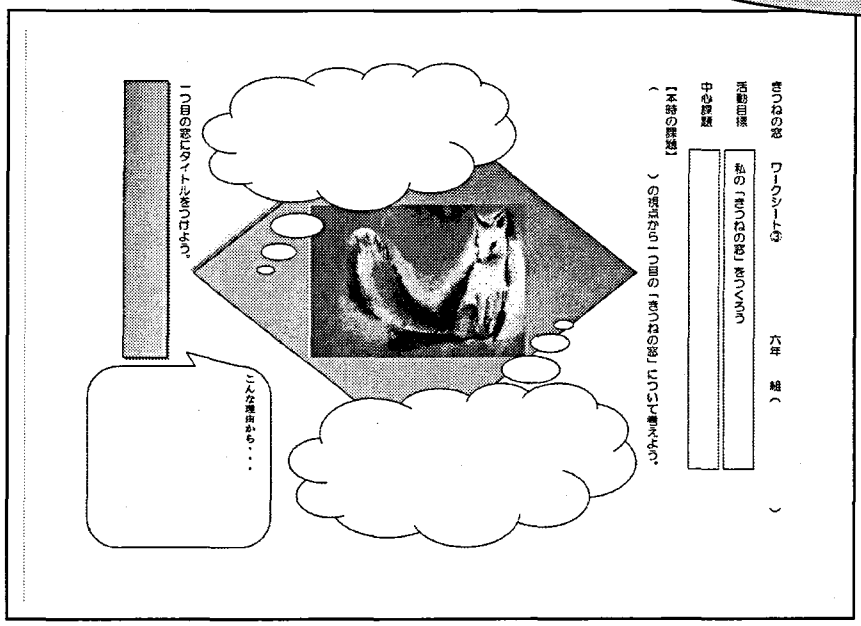
Ｃ５：手を洗うところまでは，不思議な世界と現実の世界の境のようなところにいる感じです。

Ｔ：手を洗ってしまって完全に現実に戻ったということなんですね。本当ですか。では，どうしてその後も「ぼく」は窓を作り続けるのですか。（ゆさぶり発問）

２次では，中心課題を追究していく過程において，「さまざまな角度から物事をみる技術」を活用したジグソー学習を取り入れた。この作品は主人公「ぼく」の視点で語られている物語のため，児童は自然と「ぼく」の立場に立って読み進めていく。そこに，対立する人物である「きつね」の視点や「情景描写」に込められた「作者」の視点で読むことを加えることで，このファンタジー作品のしかけをより味わいながら読むことができると考えた。そこで，読む視点によって３つのコース（ぼく・きつね・作者）を設定し，コース間の交流を通して読みを深めていった。

このジグソー学習においてもワークシートを効果的に活用できるように工夫した。課題に対して，自己内対話での考えを書く欄，グループ対話でまとめたことや新たに考えたことを書く欄など，交流することで思考（読み）が深まっていくような様式を考えた。児童は自己の読みを友達の読みと比べながら確かなものにしたり，深めたりすることができていた。そして，３つの「きつねの窓」にタイトルをつけていく活動を設定することで,「きつねの窓」には一体何が映し出されるのかを考えながら,作品の主題に迫ることができた。

【１つ目の窓について考えるワークシート】



様々な角度から物事を見る技術

【視点別コース学習】

A「ぼく」の視点

○きつねの母親を見てどんなことを考えたのだろうか。

B「きつね」の視点

○どうして母親の姿を見せたのだろう。

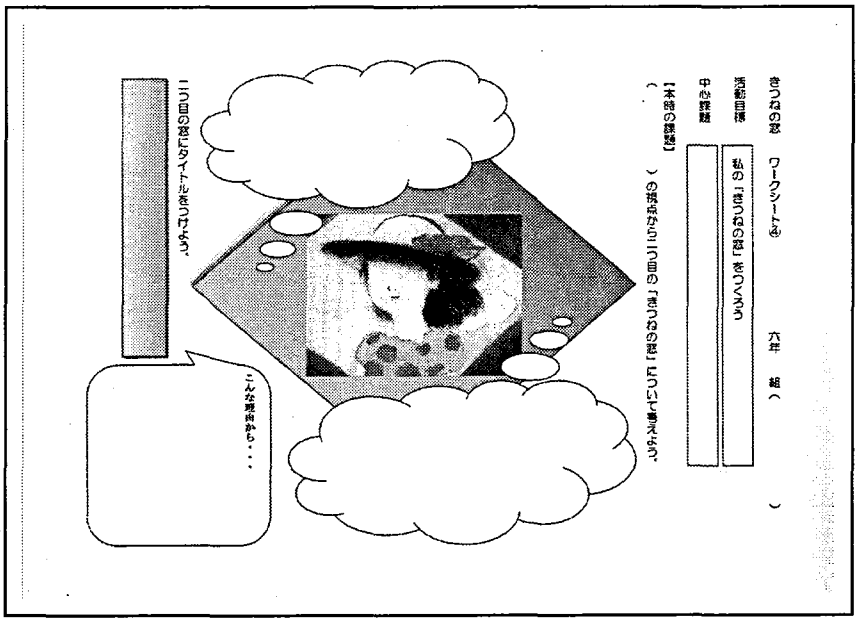
C「作者」の視点

○どうしてきつねの母親の姿を１つ目の窓に映したのだろう。

↓

３つの視点の交流を通して読みを深めるジグソー学習

【２つ目の窓について考えるワークシート】



【視点別コース学習】

A「ぼく」の視点

○昔大好きだった女の子を見てどんなことを考えたのだろうか。

B「きつね」の視点

○どうして大好きだった女の子の姿を見せたのだろう。

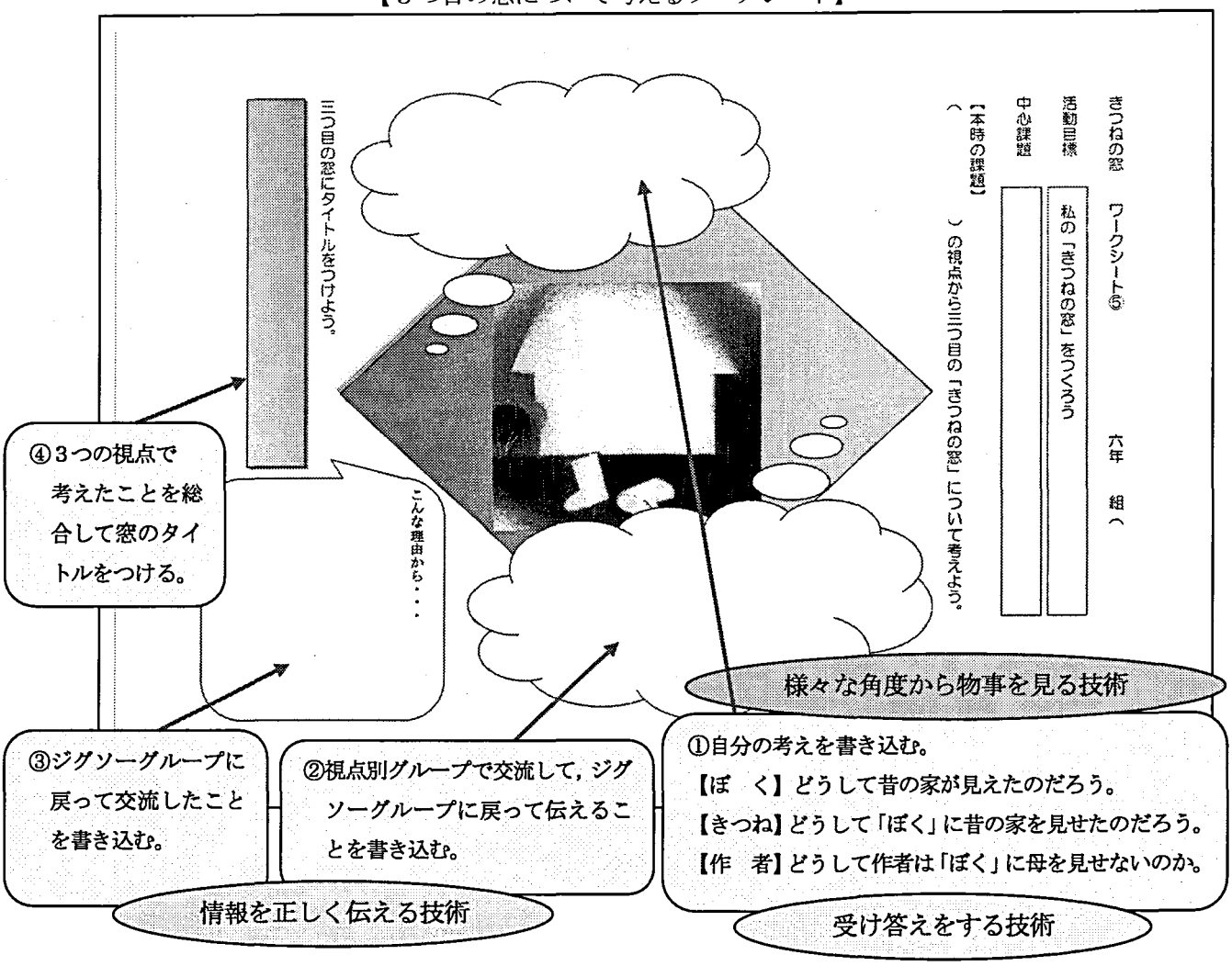
C「作者」の視点

○どうして大好きだった女の子の姿を２つ目の窓に映したのだろう。

↓

３つの視点の交流を通して読みを深めるジグソー学習

【３つ目の窓について考えるワークシート】



授業記録から（ジグソーグループの全体交流の場面）

Ｃ１：窓のタイトルは「せつなくて悲しい窓」にしました。どうしてかというと，「ぼく」が昔の家を見てだんだんと悲しい出来事を思い出しているからです。その窓は母を亡くした「きつね」が自分と同じ思いにさせようとして「ぼく」に見せたんだと思います。

Ｃ２：窓のタイトルは「悲しみと楽しみの窓」としました。それは，最後には悲しい思い出で終わっているけれど，初めは懐かしい昔の家を見て「ぼく」がどきどきしているからです。

Ｃ３：「悲しみ」は分かるんだけど「楽しみ」というのが分かりません。結局「ぼく」はせつなくなって最後まで窓を見ることができなかったからです。「胸がどきどきしてきました」というのは「楽しみ」という気持ちとはちょっと違うと思います。

Ｃ４：「ぼく」はせつなくなって両手を下ろしたあとに，「それにしても，ぼくはすてきな指をもちました」とあるから，この窓に対して「楽しみ」という気持ちもあると思います。

Ｔ：「ぼく」は「すてきな指」と言ってるけど，何がすてきなの？

Ｃ５：この指があると昔の大切な思い出とか見れるからです。

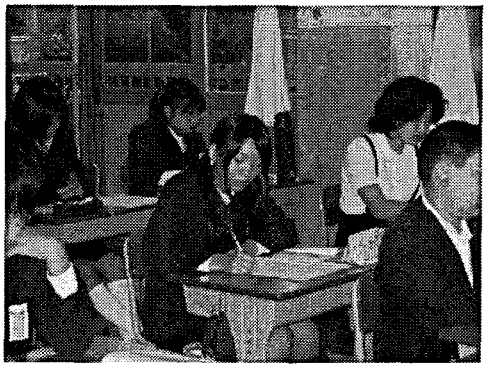
Ｃ６：もう二度と会えない人が見れるからです。

Ｔ：見るとまたせつなくなるかもしれないのに「すてきな指」なの？（ゆさぶり発問）

「きつねの窓」には何が映し出されるのか。そのことを児童はこの作品を読むことで，「２度と会うことができない大切な人」，「２度と見ることができない大切なもの」，「２度と体験することができない大切な思い出」などと考えた。

単元の最後である３次では，自分の「きつねの窓」には何が映るのか考える場を設定した。文学を通して自分自身を見つめ直す場である。児童には映し出されたものが目に浮かぶように「情報を正しく伝える技術」を活用した描写をさせた。そこに描かれたものは決して楽しい思い出ばかりではなかった。まさにこの作品の主人公が見たような「せつない情景」を描いた児童もいた。６年生の児童が自分の過去を振り返りながら，２度とかえらない「あのとき」に思いを馳せることは，大変貴重な時間であった。

【自己と向き合う時間】



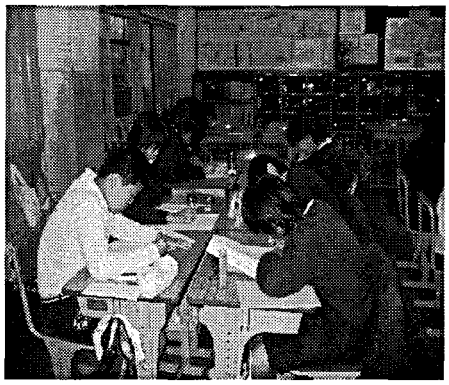
【児童が見た私の「きつねの窓」】

窓の中に灯りがついています。その灯りの中にぼんやりとベッドが見えてきました。そのベッドの少しはなれた所にテレビやタンスがあります。

ここは・・・昔、私のおじいちゃんが入院していた時の部屋だったのです。私はだんだん胸がどきどきしてきました。

「もしかしたら、おじいちゃんがあのベッドにねているかもしれない。」

しばらく私は窓の中の部屋を見ていたけれど、なんだか急に悲しくなってきました。今はもうこの部屋におじいちゃんはいないのです。



窓を見ると、白い箱があります。ダンボールです。底にはタオルがしかれていて、白と黒のぶち模様の子ねこがいます。もぞもぞと動いて「ミーミー。」と鳴いて出ようとしています。でも、途中で力つきて、ぽてっと落ちてしまいます。

私はその子ねこを飼いたいと家族にたのんだのです。名前は「ヒロシ」に決まりました。だいぶ大きくなって外で遊ばせるようになりました。毎日散歩に出かけて疲れたらお気に入りの服のある所でねていました。

でも、もう「ヒロシ」はいません。家族の所へ帰っていったのかもしれません。私は今もどこかで元気にしていると思っています。

３　成果と課題

「言語技術」を活用した「因北小スタイル」の文学の授業で，児童の読みがどのように深まっていくのか，「きつねの窓」を教材に１単元を通して検証してきた。「言語技術」を活用することで，「作品を丸ごと読む」，「主題に迫って読む」，「視点を変えて読む」，「自己を見つめながら読む」という多様な読み方ができ，そのことが児童の読みの深まりにつながったと考えている。「言語技術」は「型」である。それを文学の授業に効果的に取り入れれば，児童は文学の「読み方（型）」を身につけていけるのではないだろうか。

今後は，児童が身につけた「読み方」で自ら文学作品に向き合っていくような学習活動を考えてみたい。そのためには，「言語技術」の日々のトレーニングを積み重ねながらその習熟を図っていくことも必要である。